

回顧録

アラビスト外交官の 39 年 第2回

塩尻 宏(中東調査会参与、元駐リビア日本国大使)

本文はアラビア語専門の外務省員として 39 年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012年8月28日から2013年10月1日まで29回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載された回顧録を、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに 9 年間が経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めている現在、外交の舞台で活躍を目指す若者や、最近の国際関係について学びたいと考える人々にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

(2) カイロでアラビア語を学ぶ 中・高校の体験入学も

2012 年 09 月 04 日
(約 5000 字)

《語学研修は家庭教師と》

外務省の研修では研修員の配属先にある日本大使館で中堅の外交官が大使から研修指導官に指名されて、研修員の語学研修や生活指導を行うこととなっています。私が派遣されたエジプトでは同じアラビア語研修員を経験した先輩が指名されました。外交官のヒヨコのような研修員にとっては、研修方針から生活万般まで指導官の監督と承認の下にありました。右も左も分からぬ異国の地での指導官は頼り甲斐があると同時に怖い存在でもありました。

カイロに着いて数週間後には、先輩が探してくれていた候補物件のうちから選んだエジプト人家庭での下宿生活(ホームステイ)が始まりました。ホームステイ先では、研修指導官の手配によりエジプト人のアラビア語教師シャラフ先生(Prof. Abdelazim Sharaf)によるアラビア語講座が始まりました。日本語はもちろんできないし英語もおぼつかないシャラフ先生は、最初の頃は毎日、そのうちに週に2~3回、下宿先の私

部屋にやって来て、アラビア語についてアラビア語で数時間朗々と講義してくれました。今にして思えば、アラビア語学の深みと面白さが少し分った気がするのは威厳と温かみをもった先生のお陰ですが、毎回宿題まで出されるので付いて行くのは結構大変でした。

当時シャラフ先生はエジプトで有数の高等学校の教頭を務めており、アラビア語についての博識は抜群でした。後に東京外国語大学アラビア語学科の外国人教授として招聘されて、約8年間にわたって同校のアラビア語教育に貢献されました。また、日本滞在中には外務省研修所のアラビア語講師をも務められ、多くの人材を育てられました。それらの功績により、1989(平成元)年春に叙勲(勲三等瑞宝章)されています。まさに人格・識見共に素晴らしい人物で、アラビア語学習のみならずエジプトでの生活面での悩みなどにも親身に相談に乗ってもらいました。異文化社会での研修生活が何とか挫折しないで終えることができたのは、その先生のお陰だと思っています。

そのシャラフ先生は、私が在ドバイ総領事として在勤中には既に引退されておられましたが、カイロ・ドバイ間の往復航空券とアラブ首長国連邦の入国ビザを個人的に手配してお招きし、総領事公邸に滞在して頂いたことがあります。先生がドバイ滞在中には勤務時間外に市内をご案内すると共に、私の研修時代や他の先輩・同輩研修生の消息などについて懐



エジプト(ギザ)のシャラフ先生宅にて、シャラフ先生(右)と長女イマーンさん=2005年12月撮影



シャラフ先生(右端)と長女イマーンさん(右から2番目)。左端は私の妻和子と長男(左から2番目)=1982年7月撮影、西船住宅の自宅にて

かしく語り合ったことを思い出します。引退後のシャラフ先生は、カイロ郊外のご自宅でご家族（ご夫人は既に他界、2男2女は全て医師）と共に静かに暮らしておられました。いつまでもご健在で居られるよう願いながら、近いうちにお訪ねしたいと思っていましたが、つい先日、2012年8月1日に87歳で逝去されたとの連絡を受けました。残念で寂しく思うと共に、時代の流れを感じます。

《20歳を過ぎた中学生》

下宿先でエジプト人の先生からアラビア語でアラビア語の講義を受けると共に、大使館の研修指導官の指示で、先輩研修員に倣って現地の小・中学校に体験入学してアラビア語授業を受けることとなりました。指導官が目星をつけた学校と交渉して特別許可を取り付けてくれましたが、既に日本の大学でアラビア語を専攻していた私の場合は、小学校は省いて中学と高校に通学することになりました。先ずはカイロ中心部にある私立中学校のパトリキア校に通うことになりました。

到着して未だ間もなく土地勘も全くなかったので、最初は下宿先からそのパトリキア校にタクシーで行きました。初日には職員室で担当の先生に挨拶しましたが、もの珍しさもあって職員室の他の先生方からも大変暖かく迎えられたのを覚えています。アラビア語の授業には「作文」、「読み方」、「文法」などがあり、打ち合わせの結果、学年に関係なく午前中のアラビア語関係の授業の幾つかに出席することにしました。

当時のカイロ市内には架線からの電気で動くトロリー・バスの路線が、庶民の交通機関として発達していました。下宿の家族に「ヒロシは中学校にタクシーで通うのか？家の前から888系統のトロリーに乗ればパトリキア校の前まで直通なのに…」と言われたこともあり、そのうち、下宿から路線バス（トロリー・バス）で通学するようになりました。

パトリキア校での初日には、早速に担当の先生に連れられて教室に案内され、「新しい友達だ」と言って生徒たちに紹介され、空いた席に座って授業に参加しました（その時の授業が「作文」だったか「読み方」だったかは覚えていません）。宿題が出されていたようで、当てられて生徒が順番に答えていました。答えが上手く言えない生徒には、先生が「手を出せ」と言って、持っていた竹定規を縦にして手のひらを叩いていました。結構強く叩かれていたようで、手を引っ込んで逃れようとする生徒もいましたが、先生に睨まれて最後は観念して叩かれていきました。今の日本では問題になるかもしれません。当時のエジプト（今もそうかもしれません）では生徒や学生に対する教師の威厳は絶大で、教育の厳しさを垣間見た気がしました。

授業中は緊張している生徒たちも、合間の休憩時間には打って変わって元気良く校庭で走り回って遊びます。私も校庭に出てみたところ、好奇心の強い生徒たちに取り囲まれ「どこから来たの？」「名前はなんと言うの？」「どこに住んでいるの？」など

と質問攻めに合いました。そのうちに「歳はいくつ？」と質問する生徒がいて「26 歳だよ」と答えると、「かわいそうだね、そんなに勉強ができなかったのか！？」と言われました。純真な彼らが私を同級の転校生として受け入れてくれたことを懐かしく思い出します。

パトリキア中学校に 1 ヶ月あまり通った後、同じカイロ市内の私立高校であるフレル校に転校しました。そこでも 1 ヶ月あまりアラビア語関係の授業に出席し、3 ヶ月ほどの中学と高校の体験入学は終わりました。研修 2 年目にはカイロ大学文学部アラビア語学科に聴講生として登録し、幾つかの授業に出席してみました。エジプト方言のアラビア語でまくし立てる先生の講義内容は殆ど理解できませんでしたが、学生たちは熱心にノートを取っていたことが印象に残っています。

カイロでの 2 年間の研修期間は瞬く間に終わりました。前回書きましたように外務省のアラビア語研修期間は基本的には 3 年です。入省前にアラビア語を専攻してアラビア語で受験した私の場合には 2 年間に短縮となつたので、1 年前に入省した先輩職員と同時に研修終了となりました。下宿で体系的なアラビア語講義を受けていた私にとっては、中学、高校、大学での体験入学を通じてエジプトの教育現場を見聞できたことは、エジプト社会を理解する上で大変有意義であったと思っています。

《外務省の職員採用試験と外国語》

以上が、私が 1967 年にアラビア語研修員として過ごしたエジプトでの様子です。ご承知のとおり、外務省は、本省(約 2,200 名)、在外(約 3,500 名)を併せて 5,700 名余りの定員と 6,000 億円余りの予算で運営されています(平成 24 年度一般会計予算)。1 府 12 省庁からなる現在の日本の行政組織の中で比較すると、外務省の定員は国家公務員総数の 0.99%(行政機関職員数の 1.99%)、予算は一般会計総額の 0.68% となり、小規模組織の一つですが、他方、世界中の主な言語の全てに対応できる専門家を擁している我が国最大の組織と言えます。

外務省では 1894(明治 27)年に試験選抜による職員採用制度を始めました。選抜試験には上級職試験(外交官領事官試験、高等試験外交科試験などを経て外務公務員採用上級試験となり、平成 13(2001)年に国家公務員採用 I 種に統合)、留学生試験(外務省留学生試験、外務省語学研修員採用試験などを経て、昭和 52(1977)年に外務省専門職採用試験に統合)、中級職試験(外務書記生試験、外交官領事官採用中級試験、外務公務員中級試験などを経て、昭和 52(1977)年に外務省専門職採用試験に統合)があります。

留学生試験出身者を中心としていた外務省の語学専門家養成は、その後、必要に応じて、大正 10(1921)年からは上級職試験出身者(当時は高等試験外交科試験出

身者)、戦後の昭和 25~6(1950~51)年頃からは中級職試験出身者(当時は外務書記生採用試験出身者)の一部にも在外語学研修が課せられるようになりました。

上記の通り外務公務員採用試験制度が改正されましたので、現在は外務省が独自に行なっているのは外務省専門職採用試験のみです。平成 24 年度の「試験案内」によれば、外国語試験は英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・オランダ語・アラビア語・ペルシャ語・ウルドゥー語・ヒンディー語・ミャンマー語・タイ語・ベトナム語・インドネシア語・中国語・朝鮮語のうちから 1 カ国語を選択できることとなっており、志望研修語との関連性はないと説明されています。

《外務省のアラビスト》

外務省のアラビア語専門家(アラビスト)の嚆矢は、大正 15(1926)年に留学生試験に合格して入省された大原與一郎氏です。日本の外務省は、90 年近く前からアラビア語の専門家を養成していたことになります。大原氏は、太平洋戦争後の省庁整理の時期に退官されましたが、その後、私の母校で一時的にアラビア語を講義されていました。そのことは、前述の《アラビア語事始め》の項でも触れました。

私が今から 45 年前に入省した当時は、戦前に留学生試験で入省したアラビストがまだ現役で活躍していました。入省直後に挨拶に伺った先輩職員から「君は外務省アラビストの 29 番目だ」と言われたのを覚えています。当時のアラビア語専門家の陣容は、昭和 34(1959)年から始まった上級職試験採用者のアラビア語研修者を含めて 30 名弱でした。

その後、国際社会におけるアラブ世界の存在感の高まりと日本とアラブ世界との関係拡大を反映して、今では外務省の現役アラビスト職員は、本省や在外で研修中の約 20 名を併せて、約 150 名となっています。因みに、他の中東主要言語のペルシャ語、トルコ語の専門家は、研修生を含めてそれぞれ 30 名前後、ヘブライ語専門家は 11 名となっています(平成 24 年 4 月現在)。

先日の朝日新聞(2012.5.13 朝刊)に「教えて！ 政治の疑問一首脳会談の通訳、だれがしているの？」というコラムがあり、日本の首脳が外国首脳と会談する時の通訳は外務省の若手職員が務めると説明されていました。私も幾度か昭和天皇や総理、外務大臣などとアラブ首脳との通訳を務めました。普段は省内の部局や在外の日本大使館などで日常の業務に従事しているところに、通訳の依頼(と言うか指示)が突然に来ます。その時の事情によって数日前のこともありますし、数週間前であればあります。その感じです。

通訳依頼を受けると、直ちに関係資料を貰って準備を始めますが、海外在勤中に総理や大臣の中東訪問の通訳依頼があると資料の入手に手間取ることがあります。資

料に基づいて、日本側の発言案をチェックして専門用語などのアラビア語訳語を確認します。本番はナマの会話ですので、まさに出たとこ勝負です。終わった後、大抵の場合は不十分な出来栄えを反省して自己嫌悪に陥っていました。

通訳は目立つ仕事ですが、外務省の語学専門家に期待される仕事の一部でしかありません。同僚アラビストの中には、現地の音楽や映画に異常に詳しい人、イスラーム以前からの伝統を有するアラビア語詩に造詣が深い人、イスラームが多数派の社会の中にあっても宗教的にはモザイク状態にある中東地域の宗教問題を掘り下げようとする人、特定国の治安組織の内情を追いかける人など、それぞれの現地経験を踏まえて、アラブ社会の深層を垣間見ている人たちが居ました。現地社会に溶け込んで研修した経験は、本省や大使館の日常業務を遂行する上で、相手国または地域の動向を正確に理解するのに欠かせないと思います。（8月号に続く）